

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1065 号	氏 名	井 戸 芳 和
論文審査担当者	主 査 川真田 樹人 副 査 野見山 哲生 ・ 池田 修一		

### (論文審査の結果の要旨)

肘部管症候群の術後回復過程には不明な点が多い。今回、術後回復の予測に役立てるため、尺骨神経皮下前方移動術が行われた変形性肘関節症を合併する肘部管症候群 52 例に対し、術前、術後 1、3、6、12 か月、および 24 か月以上の最終観察時 (24 ~78 か月、平均 34.8 か月) に、以下の項目を評価した。1) 患者立脚型上肢機能評価法である The Disabilities of the Arm, Shoulder and Hand (DASH) スコア、2) Visual Analogue Scale (VAS) によるしびれの程度、3) 握力、4) ピンチ力、5) 小指の圧感覚である Semmes-Weinstein (SW) monofilament test 分類、6) 小指の 2 点識別距離 (2PD) による感覚機能分類、7) 尺骨神経の運動神経伝導速度分類 (MCV)。連続変数 (1, 2, 3, 4) については線形混合効果モデル、およびカテゴリ変数 (5, 6, 7) については累積ロジスティック回帰モデルを用いて解析した。いずれのモデルにおいても、共変量として年齢、性別、術前重症度 (McGowan 分類) を投入し、危険率 5%未満を有意とした。

その結果、次の結論を得た。

- 1) 術後、すべての評価値は有意に改善していた (DASH スコアは術後 6 か月、しびれおよび SW 分類は術後 1 か月、握力、ピンチ力、2PD 分類および尺骨神経の MCV 分類は術後 3 か月で有意に改善していた)。
- 2) 術後 12 か月以降、有意に改善した評価値はなかった。
- 3) 主観的評価である DASH およびしびれの値は、年齢、性別、術前重症度の影響を受けていなかった。
- 4) 客観的な筋力、感覚、神経機能評価である握力、ピンチ力、SW 分類、2PD 分類および MCV 分類は、いずれも術前重症度の影響を受けていた。

以上より、変形性肘関節症を合併する肘部管症候群に対する尺骨神経皮下前方移動術後においては、しびれおよび小指の圧感覚が早期に回復し、次いで運動機能である握力、ピンチ力、運動神経伝導速度が回復することがわかった。この要因として、本研究において証明はできていないが、変性した軸索 (萎縮した筋肉) の回復には時間を要することが考えられた。最終観察時まで追跡できた症例数減少による統計学的検出力低下のため、各評価値の術後 12 か月以降の有意な回復の有無については断定できないが、本研究の結果は術後回復の予測および術前患者への説明に有用である。

変形性肘関節症を合併する肘部管症候群術後における回復過程を詳細に調査した論文は他になく、本研究内容は極めて意義深いものである。したがって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。